令和五年度別府市小・中学生「人権作文」入賞作品

佳作

「ほんの少しの勇気と行動する力」

別府市立東山小学校六年　栃原　陸

歩行をするために、車椅子を利用している人は、全国で約二百万人いると言われています。これは、全人口の約一・六パーセントになります。世界では、車椅子を利用する人が約一億三千万人で、そのうち六十五歳以上の車椅子利用者は約三千三百万人とも言われているようです。

車椅子を利用している人は、私たちの周りにもごくふつうにいます。私も、病院や駅、スーパーマーケット、街角などの公共の場でよく見かけます。これは、別に特別のことではなく、日常的なことだと、私は思っています。

ある日、私は、母とよく行くスーパーマーケットへ買い物に行きました。すると、車椅子を利用している男性に出会いました。男性も、私たちと同じように買い物をしていました。男性は買い物カゴをひざの上にのせていて、選んだ品物をそのカゴに入れていました。

「大変だなあ。品物が増えたら重くなるだろうな。」と私は思いました。

売り場を少し回って、男性に出会ったときのことです。ひざにのせていたカゴを、男性は落としてしまいました。カゴの中に入っていた品物は床に散らかってしまいました。私は、一瞬の出来事に、はっとして立ちすくんでしまいました。

その時でした。私のそばにいて買い物をしていた女性がとっさにかけ寄りました。女性は、落ちた品物をパパッと拾って、男性にわたしました。

私は、「すごいなあ。」と、女性のとった行動に感心しました。同時に、そばにいながら何もできなかった私自身を少し責めました。「なぜ、落ちた品物を拾えなかったのだろう。」「なぜ、女性を手伝う行動がとれなかったのだろう。」と。

男性は、笑顔で品物をもらい、また買い物を続けました。私は、何か温かいものが心に残りました。そして、男性の笑顔が心に焼きつきました。

女性にあって、私に足りなかったものは何かを考えてみました。それは、「ほんの少しの勇気と行動する力」であることがわかりました。困っている人が目の前にいた時、周りにいるみんなが助けたり、手伝ったりすることは、ふつうのことなんだと、気づきました。今回、あの女性がとった行動は、「ほんの少しの勇気と行動する力」が働いた当たり前のことなんだと感じました。

車椅子を利用している人の困りが多いことにも気がつきました。特別のことではなく、困った時には、周りにいつも「ほんの少しの勇気と行動する力」をもった人々がいる社会であれば、きっと世界の車椅子を利用している人も安心して暮らせるのだと思います。私も生活の中に、「ほんの少しの勇気と行動する力」をもっておきたいと考えています。